



インターホンを鳴らさない販売員さん

加藤かな（愛知県）

初めて母から「北海道から来た販売員さん」の話聞いたときは、ちよつと不安になった。北海道の牛乳や野菜をトラックに積んで全国を回っている人が訪ねてきて、そのおじさんの牛の話がとてもおもしろくて牛乳を買ったのと嬉しそうに言う。

私はその話を聞いて、一人暮らしの高齢の母に何か高いものを買わせようとしていたのではないかと疑ってしまったが、値段を聞くとそんなことはなかった。私の実家は田舎で、歩いていける場所にスーパーもコンビニもないので、買い置きできない牛乳を買えるのはありがたかった。本州から出たことすらない母にとって初めて聞く北





海道の話はとても興味深いものだったようで、私は実家に帰るたびに北海道のなまりや雪かきの話を聞かされたものだった。

母が亡くなった後、私は実家を片付けるために週末ごとに家に帰った。ある日の夕方、やけにカーオーディオの音が大きい車が家の前に停まった。走り去る気配もなく、しばらく停車しているようである。「なんだろう？」と不審に思い、窓から外をのぞいてみると一台のトラックが停まっていた。運転席の男性はニコツと笑って私に会釈をした。「あつ、牛乳の人かも」と思い、急いで外に出た。

男性は音楽を消して丁寧に自己紹介をした。私はやっと会えたと思った。

母が亡くなったことを伝えると、男性はお悔やみの言葉を述べ、何度も何度も深々とお辞儀をした。その様子から本当にさみしく思ってくれていることが伝わってきた。





「実家に帰るたびに母から北海道の話が聞かされましたよ。行ったこともないのにまるで見てきたみたいに話すからおかしくて」と私は言った。

「そんなに私の話を楽しみにしてくれていたなんて知りませんでした。うれしいなあ」と男性はしみじみとした口調で言った。

「音楽が聞こえてきたから、なんだろうと思って外を見たのです。まさか牛乳を売る車だとは思いませんでした」と私は言った。すると、男性は意外ないきさつを教えてくださいました。

「これは私と加藤さんが決めた合図です。体の調子が悪くて寝込んでしまう日がある。インターホンが鳴って、きつと牛乳の人だと思うのだけど、起き上がることができないほど辛い。せつかく来てもらったのに無視することになってしまっても気が重





いと度々おっしゃっていました。では、音楽の音量を上げて家の前でしばらく待っていますよ。お元気だったら窓から顔を出してください。それならインターホンより気持ちが楽でしょうと私から提案したのです」

それを聞いてハツとした。母は初対面の日からこの男性の気質を気に入り、この人から牛乳を買おうと決めたに違いなかった。私は母のお気に入りのお牛乳を1パック買った。そして、トラックが見えなくなるまで男性を見送った。

【令和元年度・優秀賞】

